

疑問の本質について

龐 黔 林

摘 要

論疑問的本質

龐 黔林

在現代日語中，疑問句作為一個語法範疇，是根據句中是否存在終助詞“か”或疑問詞，或是否是上昇語調來決定的。但即使形式上同是疑問句，也有很多不同的分類。這些分類都是基於不同的角度來劃分的。要對疑問句進行分類，首先要弄清疑問的本質是什麼，是“疑”還是“問”。疑問的本質問題不僅關係到疑問句的分類，同時也是討論疑問句的定義、焦點等問題的重要因素。本文通過論證，認為疑問的本質在於“疑”，而“疑”又分為三個階段：它們分別是“對命題內容的疑”、“對聽者的接受意願的疑”以及“不存在疑的周邊階段”。而且“疑”的階段不同，疑問句的層次也不一樣。

1. はじめに

疑問文に関する研究は数多く行われてきたが、疑問文と呼ばれるものには一体どんなものが含まれているのだろうか。従来の研究において一般的に認められているのは『国語学大辞典』のような規定であろうと思う¹⁾。

『国語学大辞典』(p.217: 疑問表現の項)によれば「疑問文」は、次の(1)に示される三つの条件のいずれかによって形式的に規定される文類型の一つである。

- (1) ①終助詞「か」の主文末への付加
- ②「だれ／どうして／いつ」などのいわゆる疑問詞の存在
- ③上昇音調

この疑問文の条件に当てはまるものはつぎの(2)～(10)のようなものである。

- (2) 野々宮さん、光線の圧力の試験はもう済みましたか。 (『三四郎』)
- (3) 金はいつ受け取ったのか。 (『三四郎』)
- (4) どこへ行きたい？
- (5) 一つ教えてあげようか。 (『マザコン刑事の事件簿』)
- (6) 夕方の捜査課長会議には出られそうもない。電話しといてくれんか？
(『三毛猫ホームズの犯罪学講座』)
- (7) a「熊本です」
 b「熊本ですか。熊本には僕の従弟も居たが、随分ひどい所だそうですね」
(『三四郎』)
- (8) こんな無茶な話ってあるか！ (『三毛猫ホームズの犯罪学講座』)
- (9) あたしだけ立派そうな顔をしたって、ちっとも偉くないんじゃないでしょうか？
(『女事件記者』)
- (10) もう何時かな。 (『悲しみの歌』)

ところが、一口に「疑問文」と言っても、この9つの文にはそれぞれ相違点が見られる。(2)のような文では対象となる事柄、つまり「光線の圧力の試験はもう済んだ」ことが真であるかどうか問われている。(3)のような文では対象となる事柄が成り立つことが認めた上で、その中にある未定要素(「いつ」)の部分の情報が問われている。(4)のような文では、事柄の真偽ではなく、聞き手の情意が疑問の対象とされている。(5)のような文では、行為の意志の主体は話し手であり、聞き手に尋ねているのは行為の申し出を受け入れるかどうかという点

である。(6)のような文では、行為の要求や誘いを聞き手が受け入れるかどうかを尋ねる文であり、事柄の真偽に関する文とは言いがたい。(7)のような文は疑問の形式を使っているものの、何かについて尋ねているのではなく、情報の受容という意味になるものである。(8)のような文も疑問の形式は使われているが、話し手が本当にあるかどうかについて分からないというのではない。否定対極²⁾にある応答(この文では「ない」がその否定対極の応答である)を想定させ、更に強く主張するというようなものである。(9)のような文もそうであり、「んじゃないでしょうか」の前にある部分は既に話し手の主張であると思われる。(10)のような文は聞き手を必要としない、話し手の内心の疑念だけを表すことがある。

従来の研究では、これらのいわゆる「疑問文」を幾通り分類してきた。立場が違うと、分類された体系も違ってくる。その代表的なものを挙げると、次のようになる。

1.1 統語論的な分類

統語的な形態から見ると、まず、疑問文は独立文の場合と他の文に埋め込まれた従属節の場合とがある。また、疑問詞の有無によって「yes-no 疑問文(真偽疑問文)」と「wh-疑問文(補充疑問文)」にわけられる二分法があり、更に「選択疑問文」も入れて三分法される議論も取り上げられている。

1.2 伝達論的な分類

国立国語研究所(1960)では、「表現意図」という伝達論的な観点を導入した文類型の分類を提案されている。文全体を詠嘆表現、判叙表現、要求表現、応答表現に分け、いわゆる疑問文を「質問的表現」と「判断未定の表現」に分けて、それぞれ要求表現と判叙表現の下位概念として位置付けている。

また、阪倉(1975)では、「別にまた、その表現意図からいって、疑問表現には、その名のごとく、(a)〈疑〉の表現と、(b)〈問〉の表現とが含まれている」と述べられている³⁾。この「疑」と「問」との分け方も多くの研究者から認められていると言える。

1.3 本稿の目的

以上述べられた疑問文の分類は代表的なものだと言えよう。従来の研究はこれらの議論に基づいて、或いは批判して成されてきたものが多いと思われる。

また、疑問文と言えば、対他的な「問い」の表現を中心に考えられる傾向が一般的に強いようである。例えば、安達(1999)では、疑問文の成立条件について次のように述べられている。

(11) (a) 話し手には命題内容の真偽判断、あるいはその命題を構成する情報の一部が欠けている。

(b1) 話し手は応答可能な存在として聞き手を評価する。

(b2) 話し手は聞き手に問いかけることによって不確定性を解消することを意図

する。(同書：131)

つまり、疑問文を成立させる条件としては、「命題内容の不確定性条件」と「聞き手への問いかけ性条件」と、この二つの条件が不可欠になっているということが主張されている。これは実は疑問文の中の、いわゆる「質問文」の成立条件と見なした方が適切ではないかと思う。

ここで、一つ問題点が浮いてきた。つまり、疑問文を「問い」中心の見方で分析すべきか、或いは「疑い」中心の見方で分析すべきかという問題なのである。これは実は疑問の本質に関する問題でもあると思われる。なぜなら、疑問表現について、例えば次の(12)で示されるように、「疑い」と「問い」とを区別しながら、それらをあわせて疑問表現に含める考え方が一般的である。

- (12) 疑問表現 広義には、疑いと問いとの表現の総称。狭義には、応答を求める要求表現、すなわち質問の表現。(『国語学大辞典』〈「疑問表現」の項〉)

つまり、疑問表現には、「問い(質問とも呼ばれる)」と「疑い」と二つの中心的機能を持っている。ところが、この二つの機能のうち、どちらが疑問の本質なのかについて、議論が多い。疑問文の分類について考える際、疑問の本質を避けて通るわけには行かないだろう。疑問の本質は疑問文の定義や分類、疑問の焦点などを考える際、重要な要素である。本稿では、疑問の本質について述べてみたいと思う。

2. 先行研究

例えば、日本語についてではないが、英語を対象とした見方の一例を取り上げてみよう。

- (13) 疑問文は本来相手に対し自分の欲する知識を与えてくれるよう頼むためのものである。従って、その内容は単なる疑問のほか、要求・懇請・命令などを含むこともある。(大塚高信編1970、『新英文法辞典〈改訂増補版〉』三省堂)(山口(1990: 3)より再引用)

この説明では、疑問の本質は、コミュニケーションの相手への「問い」にあると見てよいだろう。

また、一般的に言われる「狭義の疑問表現」とは「質問の表現」であるということも、疑問の本質は「問い」にあると主張していることを示しているだろう。

安達(1999)は(11)に示された疑問文の成立条件のうち、(a)の条件を「命題内容の不確定性条件」、(b)の条件を「聞き手への問いかけ性条件」と呼んでいる。

安達のこの議論は疑問の本質が「疑い」と「問い」と両方にあるという見方から出発したものと見えよう。

これに対して、森山（1989：76）は、

- (14) 疑問文の第一要件は、情報内容の不確定性であり、第二要件は、発話の聞き手指向性（聞くべき相手を持ち、その人に対して発話すること）であると言える。

と指摘している。これは安達（1999）と共通しているところが多いが、安達（1999）はこの二つの条件が同時に必須条件だという主張に対して、森山（1989）は次のように主張している。

- (15) ……疑問にならない質問文はない。このように、疑問文の認定において情報内容の不確定性をあくまで第一要件とする理由はここにある。（同書：77）

つまり、「情報内容の不確定性」は「発話の聞き手指向性」より優先されている。このような議論が疑問の本質が「疑い」にあると理解できるだろう。

以上のように、従来の研究では、疑問の本質を「問い」、又は「疑いと問い」、或いは「疑い」にあると、議論を三分にされているということができると思われる。本稿の結論から言うと、疑問の本質が「疑い」にあると考えたい。

3. 疑問の三つのタイプ

本稿は疑問文に「疑い」と「問い」の存在するありかによって、疑問を三つのタイプに分けることができると主張する。つまり、

- (16) (a) 疑いだけで問いのないもの
- (b) 疑いも問いもあるもの
- (c) 問いだけで疑いのないもの

の三種である⁴⁾。

そのうち、(16a) は一般的に言われる「疑いの文」である。例えば（文例は仁田1989より引用）、

- (17) あら、私、瞬間湯沸器の点火栓を消してきたかしら？
- (18) あいつ、ユーレーかな、やっぱり。
- (19) もしかしたら、おれはもう手遅れじゃないだろうか。

のような文がそれである。(17) はただ話し手が自分のしたことについてはっきりした記憶がないため、その疑いを自分に確かめているもので、相手に解答を求めているものではない。また、(18) は「あいつはユーレーである」ということについて疑念を持っているものの、それ

を相手に解答を求めているものではなく、話し手自分の内心にとどまるものである。(19)は、「もう手遅れ」であるかどうかについて判断が難しく、むしろ「手遅れ」であるが、そう言い切ることもできない、判断未定のまま文が終わってしまうものである。つまり、(17)～(19)は「聞き手への問い掛けを意図することなく話し手の判断成立への疑念を述べたもので」、「疑いの文」である(仁田1989:26)。また、仁田(1989)は「疑いの文を形成する文末形式には、『カシラ』『カナ』『ダロウカ』などがある」と述べられている。

次に、(16b)は一般的に言われる「質問文」がそれにあたるが、「質問文」についてはさまざまな規定があり、本稿では、安達(1999)で言われている疑問文を「質問文」として認めることにする((11)を参照)。つまり、「命題内容の不確定性条件」と「聞き手への問いかけ性条件」が揃う疑問文を質問文とする。例えば、

(20)「じゃあ、食事はほとんど外で食べるの？」

「いいえ、たいてい家でつくります」 (『化身』)

(21)「その人、大京銀行と昭和銀行の合併の記事も書いた？」

「はい。直接彼が記事を書いたわけじゃないけど、アンカーの人に渡す資料を集めたり、取材をしたりしました。」 (『返事はいらない』)

のような文がそれである。(20)は話し手が、相手が「食事はほとんど外で食べる」のかどうかについて「疑い」を持っており、それを相手に問い掛けて、解答を求めているものである。(21)は相手のことについてはないが、何かの事柄に疑念を持っており、その解答が相手のところにあると予測して問い掛けたものである。このような文は「疑いも問いもあるもの」であると言えよう。

最後に(16c)について言及されている論文は私見の限りあまり多くないが、山口(1990)や吉田(1994)で言われる「試問」がそれにあたるだろう。つまり、「もっぱら相手の知識や理解力をためすだけの目的で話し手にはすでに答えの分かっていることを試みにたずねる」ものである(山口1990:6)。例えば、

(22) 必ず毎日着ているシャツは、どんなシャツ？ [正解] 開襟(皆勤)シャツ

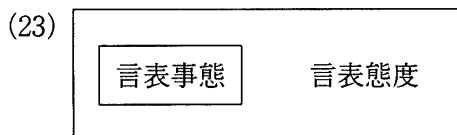
(小針1995より引用)

のようなクイズ質問がそれであろう。このような文は話し手が予め確定情報を持っているにもかかわらず、聞き手に対して問いを発するものである。クイズ質問のほかに、教師から生徒への質問などもこのような「問いだけで疑いのないもの」に属していると言えよう。

以上の三つのタイプはそれぞれ、(16a)を「疑いの文」、(16b)を「問いの文」(「質問文」はその通常の名称であるが)、(16c)を「試問の文」と呼ぶことにするが、疑問の本質からこれらの文をどう考えるべきかについては、以下詳しく議論したい。

4. 疑問の本質

1. で既に触れたように、疑問の中心的な機能が「疑い」と「問い」と二つあるということは従来の研究では多く認められているようである。仁田（1989）では、日本語文の基本構造を



のような図で表した上、更に

(24) 言表事態とは、話し手が、現実との関わりにおいて、描き取った一片の世界、文の意味内容のうち客体的な出来事や事柄を表した部分である。言表事態は、言表事態の中核である命題核、さらにヴォイスやアスペクトやみとめ方やテンスなどによって形成されている。……言表態度を形成するのがモダリティである。

と説明して、モダリティを大きく〈言表事態めあてのモダリティ〉と〈発話・伝達のモダリティ〉との二種に分けている。言表事態めあてのモダリティとは、発話時における話し手の言表事態に対する把握の仕方の表し方に関わる文法表現である。それに対して、発話・伝達のモダリティとは、文をめぐっての発話時における話し手の発話・伝達的態度のあり方に関わる文法表現である。

疑問文の立場からいうと、「疑い」は話し手が言表事態に対して疑念を持つことによって、判断ができなくなり、いわゆる「判断不成立」または「判断未定」を表すもので、認識的な〈言表事態めあてのモダリティ〉に属するものである。また、「問い」は話し手が言表事態への疑念を解消するために聞き手に問い掛ける態度を表すもので、〈発話・伝達のモダリティ〉のものであると言えると思う。

仁田（1989）は更に、〈問い掛け〉が〈問い掛け〉として機能を果たしている限り、〈問い掛け〉には言表事態めあてのモダリティと発話・伝達のモダリティが同等に存していると述べている。つまり、〈問い掛け〉の場合、言表事態への疑念と聞き手への問い掛けが同時に存しなければならないということである。

ここに至ると、「疑い」と「問い」とでは、どちらを優先させるべきかという問題が自然に出て来る。それについては本稿は次のように考える。

言語主体は疑問文を用いて聞き手に不明のところについて情報を求める場合、まず、不明のところが存在しなければならない。つまり、「疑い」がまずなければならない。疑いがあるのはじめてそれを解消するために誰かに解答を求める、即ち「問い」をするのである。

上述した本稿の考えを3. で述べた疑問の三つのタイプと関連して考えてみたい。ここで(16

a) の疑いのみを表す例文

(17) あら、私、瞬間湯沸器の点火栓を消してきたかしら？

(18) あいつ、ユーレーかな、やっぱり。

(19) もしかしたら、おれはもう手遅れじゃないだろうか。

に手を加えると、

(17') ねえ、私、瞬間湯沸器の点火栓を消してきたかしら？

(18') おい、あいつ、ユーレーかな、やっぱり。

(19') なあ、おまえ、もしかしたらおれはもう手遅れじゃないだろうか。

(大鹿1990を参照)

いずれも問い掛けを意図しない「疑いの文」でなくなり、(16b)の「問いの文」になってしまふのであろう。つまり、(17)～(19)の文頭にそれぞれ「ねえ」、「おい」、「なあ、おまえ」などの言葉を加えると、明らかに自問ではなく、すでに対人的になって、聞き手の存在が求められている文になったのである。

このことから次のことが分かる。つまり、(16a)の文であるか、(16b)の文であるかは「かしら」、「かな」、「だろうか」などの形式の問題ではなく、対人的な「問い掛け」の意図があるか否かによって決められるのである。しかし、(16a)の文も(16b)の文も共に欠かせないのは疑問文の本質的な存在である不明のところ、即ち「疑い」なのである。

仁田(1994)では、従来「疑い」を表す形式と扱われてきた「かな」の問い掛け的使用について言及し、「かな」「かしら」「だろうか」といった形式は、「発話を聞く人間が現前しないところでは、答えの文を招来しないところの、まさに疑いの文として機能するが、当の発話を耳にする人間の居るところでは、運用論(pragmatics)的に〈問いかけ性〉を有してしまうことがある」と述べている。

この問題は小林(1993)の主張と相通ずるところがあると思われる。小林は「疑問文は統語論、質問は語用論において取り扱われる言語事象である。」と主張している。従来「疑いの文」と「問いの文」は形式上から区別されており、「かな」「かしら」「だろうか」などが「疑い」を表す形式と扱われているのが一般的である。ところが、よく考えてみると、いわゆる「問いの文」というのは聞き手が存在しないと、或いは聞き手に無視されると、疑いにとどまり、また、いわゆる「疑いの文」も聞き手が存在し、しかも答えてくれると、「問いの文」となることもありうる。従って、「疑いの文」と「問いの文」を区別するのは、文(17)～(19)と文(17')～(19')とを比較しても分かるように、文全体から見て、それは聞き手めあてなのかどうかに関わるのであって、ただ形式上だけから区別され得るものではないのである。疑問文とたらしめるものはやはり「疑い」なのである。

そこで、なぜ「試問の文」のような疑問文が存在するのかが問題になってくる。これについて、小針（1995）は、「疑念の疑似的な共有」という用語を用いて説明している。つまり、「話し手が聞き手に疑念を抱かせることにより自問自答させ、答えを述べさせる」のである。話し手には「疑い」がなくても、「試問」のような文そのものにはちゃんとした「疑い」が現れている。話し手がその文中に現れている「疑い」を問いという形で、聞き手に持たせるのである。そうでないと、聞き手が何について求められているかはわからないのであり、いわゆる「試問の文」も問いかけ性を持っていても、疑問文としては成り立たなくなるのである。ということで、(16c) のタイプ——問いだけで疑いのないもの——は実質的には存在しないのである。

従って、疑問の本質が「疑い」にあると本稿は主張する故である。

5. 「疑い」の三段階

疑問の本質を踏まえて考えると、疑問文というのは、勿論、疑いがあるものである。ここで言われる「疑い」というのは、まず、安達の「命題の不確定性」がそれにあたるものである。

森山（1989）では、疑問文の意味的特性として次の二点が挙げられている。

(25) ①疑問文の第一要件は、話し手がその命題を不確定だととらえることである。

②不確定とは、話し手において真偽判断ができないということであり、肯定と否定の一種の中和現象がそのことを示す。

森山（1989）はまた、「こうした情報内容の不確定性は、統語論的には、『か』や不定要素の存在、あるいは、『か』などの疑問表示要素に代わる上昇イントネーションによって、表示される。」と述べている。例えば本稿の冒頭に挙げた文例、

(2) 野々宮さん、光線の圧力の試験はもう済みましたか。 (『三四郎』)

(3) 金はいつ受け取ったのか。 (『三四郎』)

(4) どこへ行きたい？

のような文は「命題内容への判断の不確定」を表す疑問文である。yes-no 疑問文の(2)では「光線の圧力の試験は済んだ」という命題が不確定だととらえられるものであり、wh-疑問文の(3)(4)では、それぞれ「いつ」「どこ」という疑問詞で命題内容への不確定を表している。

ところが、疑問文には、こうした「命題内容への判断の不確定」（本稿では「命題内容への疑い」と呼ぶことにする）のほかに、もう一種の「疑い」が含まれるものがあると考えられる。それは「話し手の申し出に関する聞き手の受け入れへの疑い」なのである。例えば本稿冒頭の文例、

(5) 一つ教えてあげようか。

(『マザコン刑事の事件簿』)

また、

(26) 駅まで迎えに行きましょうか？

のような文がそれである。この二文は行為の意志の主体は話し手であり、聞き手に尋ねているのは行為の申し出を受け入れるかどうかという点である。「命題内容への疑い」と「話し手の申し出に関する聞き手の受け入れへの疑い」の二類の「疑い」について、それぞれの文に、「～と思いますか」を後接すれば、区別がつくだろう。

(2') 野々宮さん、光線の圧力の試験はもう済んだと思いますか。

(3') 金はいつ受け取ったと思いますか？

(4') どこへ行きたいと思いますか？

(5') ?一つ教えてあげようと思いますか？

(26') ?駅まで迎えに行こうと思いますか。

「命題内容への疑い」を表す(2)(3)(4)に(2')～(4')のように「～と思いますか」を後接しても、相手に命題への確定を求める意味には変わりがないように思えるが、「話し手の申し出に関する聞き手の受け入れへの疑い」を表す(5)、(26)に「～と思いますか」を後接した(5')、(26')は聞き手にそういう行動の意志があるかどうかを尋ねる、別の意味の文になってしまうのである。つまり、(5)、(26)のような文は聞き手に命題内容の判断を求めるのではなく、聞き手の受け入れの意向が不明なので、それについて尋ねるものなのである⁵⁾。

話し手の行為の申し出のほかに、依頼や命令、すすめの申し出に対して、聞き手が受け入れるかどうかを尋ねるものもある。

(27) 先生……ぼくらの採点を直して頂けないでしょうか。(依頼) (『悲しみの歌』)

(28) 静かにしないか。(命令)

(29) お茶、飲まない？(すすめ)

これらの文が表している「話し手の申し出に関する聞き手の受け入れへの疑い」を、本稿では「聞き手の受け入れの意向への疑い」と呼ぶことにする。

では、なぜ疑問文には、このように二種類の「疑い」が存在するのだろうか。

野田(1997:21～25)では、話し手の心的態度が表現される機能的なカテゴリーを「モダリティ」、それを実現する文法形式を「ムード」と呼んで区別している。また、ムードは、事態

に対する話し手の心的態度を表す「対事的モード」の形式と発話の聞き手に対する話し手の心的態度を表す「対人的モード」の形式と、二つに分けられている。疑問を表す「か」は事態の成立を認めるかどうかについての対事的モードを表す形式であるのに対して、「質問」「上昇イントネーション」は聞き手に情報の提供を促す心的態度を表す形式である。

また、安達（2002）はモダリティを、命題の成立・不成立や認識的判断にかかわる「対事的モダリティ」と、伝達態度のあり方を規定する「対他的モダリティ」とに分け、疑問文を対事的モダリティと対他的モダリティの相関によって捉えるものと述べている。

以上二つの議論は、仁田（1989）で言われる〈言表事態めあてのモダリティ〉と〈発話・伝達のモダリティ〉とはほぼ同じ主旨のものである。要するに、疑問を表す代表的な形式としての「か」が命題部分にもモダリティ部分にも階層の境界を跨いで現れるものであるということになる。二種類の「疑い」が存在するのはここに由来するのだろうと思う。「命題内容への疑い」は事態に対する話し手の捉え方であり、「聞き手の受け入れの意向への疑い」は聞き手に対する話し手の心的態度である。

典型的な疑問文は、話し手が命題の成立・不成立、または命題の中にある不定要素が表している情報について、判断できなく、確定性が欠けていることを表すものである。この「疑い」を話し手自身のところにとどめれば、「疑いの文」になるが、その疑いを解消するために聞き手に情報を求める場合は「問いの文」になるのである。

本稿では、「命題内容への疑い」を優先させることにするのもこのためである。

ただし、疑問文について考える際には、「聞き手の受け入れの意向への疑い」も無視してはいけないと思う。本稿冒頭の文例

（５）一つ教えてあげようか。 （『マザコン刑事の事件簿』）

（８）こんな無茶な話ってあるか！ （『三毛猫ホームズの犯罪学講座』）

を比較しても分かるように、（５）のような文は話し手の申し出に対して、聞き手が受け入れるかどうか分からないということで発せられる文である。つまり、「命題内容への疑い」ではないが、話し手は別種の「疑い」を持っている。それに対して、（８）の文は終助詞「か」が含まれているものの、話し手は何かについて分からないというのではなく、疑問形式を用いて自分の強い否定の意志を表すだけなのである。このような文は「疑い」を持つ疑問文とは言えない、従来「修辞疑問文」と扱われてきたものである。３．で述べた疑問文の三つのタイプにあててみると、（５）は（16b）の質問文で、（８）は疑いも問いもないということで、三つのタイプ以外のものである。

従って、疑問文の「疑い」には三段階のようなものがあると思う。

（30）①命題内容への疑いを表すもの

②聞き手の受け入れの意向への疑いを表すもの

③疑いのない周辺の存在であるもの

例えば、

(31) あの新聞の記事を御覧でしたか。 (『三四郎』)

(32) 課長、押しましょうか。 (『三毛猫ホームズの犯罪学講座』)

(33) 分かるもんですか。 (『三毛猫ホームズの犯罪学講座』)

がそれぞれ①、②、③の段階にあたるものである。

6. 終わりに

疑問文の定義や分類及び疑問の焦点などを考える際、疑問の本質という問題を避けて通るわけにはいかないと思われる。典型的な疑問文というのは、まず「疑い」がないと考えられない。そして、「疑い」の段階により、従来いわゆる「疑問文」と扱われてきたものも、典型的な疑問文から周辺の疑問文まで段階的に分けられるだろう。本稿冒頭の文例を大まかに分けると、(2)、(3)、(4)は典型的な疑問文に属しており、(7)、(8)、(9)は周辺の疑問文で、(5)と(6)は両者の中間的なようなものだろうと思われる。

ただし、疑問文には、はっきりと「疑い」の三段階のどれかに区切ることのできないものがあるように思われる。各種の疑問文において、その段階間は連続しているのみならず、他の表現ともまた連続の様相を呈しているのである。例えば、「命令」を表す疑問表現

(28) 「静かにしないか。」(命令)

をよく考えると、「疑い」が存在するとは言えないのである。つまり、相手に「静かにする」という意志があるかどうかということを疑っているものとは言いかねる。ただ、話し手が自分の命令を聞き手が受け入れることを期待しているように思える。しかし、この疑問表現は次の直接的な命令表現

(34) 静かにしてください。

と比べると、「疑い」がまったくないとも言えないのである。このように、「疑い」の段階の細部などについては更に詳しく検討すべき点もまだ多くあるが、本稿ではそれらをあえて割愛させて頂く。

注

- 1) 同じ主旨のものが『日本語文法大辞典』198頁にも見られる。
- 2) 肯定と否定は対比的関係に立ち、判断の両極端に位置するものである。肯定の対極は否定であり、否定の対極は肯定である。
- 3) 山口（1990：4）より再引用。
- 4) この三つのタイプは大鹿（1990）を参照したが、中身は違う。大鹿（1990）では、(a) は原理的にありえないとされている。(b) は疑いの文であるがゆえに問いを持つ「疑いの疑問文」で、(c) は不定の語を持つがゆえに問いを持つ「不定の疑問文」である。この結論を導いたのは、「疑い」と「問い」に関する定義づけ、また聞き手が話し手自身を含むとすれば、疑いの文は自身への問い、即ち自問という解釈も可能であるという観点からであろう。
- 5) このような「話し手の申し出に関する聞き手の受け入れへの疑い」を表す疑問文は「聞き手の希望への疑い」を表す次のような文と区別しなければならない。
 - (1) 外国へ行きたい？
まず、このような文は「～と思いますか」を後接しても、意味は大して変わらない。
 - (2) 外国へ行きたいと思いますか？
また、それぞれの応答文を見てみよう。
 - (3) 「外国へ行きたい？」
「はい、行きたい。」
 - (4) 「駅まで迎えに行きましょうか？」
「それでは、よろしくお願いします。」つまり、「聞き手の希望への疑い」を表す文は「たい」という助動詞があるおかげで、疑問の焦点が文中にあるのである。このような文は、次の疑問文とは変わらないのである。
 - (5) 「外国へ行きますか？」
「はい、行きます。」つまり、「聞き手の希望への疑い」を表す疑問文は、やはり「命題内容への疑い」を表す疑問文なのである。

用例の出典

赤川次郎『三毛猫ホームズの犯罪学講座』角川文庫
赤川次郎『マザコン刑事の事件簿』徳間書店
遠藤周作『悲しみの歌』新潮文庫
島田一男『女事件記者』青樹社文庫
夏目漱石『三四郎』新潮文庫
宮部みゆき『返事はいらない』新潮文庫
渡辺淳一『化身』集英社文庫

参考文献

安達太郎, 1999, 『日本語疑問文における判断の諸相』, くろしお出版
安達太郎, 2002, 「疑問文とモダリティの関係」『日本語学』二月号, pp. 58～66, 明治書院
大鹿薫久, 1990, 「疑問文の解釈」『語文』55, pp. 17～26, 大阪大学国語国文学会
国語学会編, 1980, 『国語学大辞典』, 東京堂出版
国立国語研究所, 1960, 『話しことばの文型(1)』, 秀英出版
小林ミナ, 1993, 「疑問文と質問に関する語用論的考察」『言語研究』104, pp. 128～154, 日本言語学会
小針浩樹, 1995, 「質問文の機能の考察—クイズ質問を中心に—」『文芸研究』138, pp. 1～11, 日本文芸

研究会

阪倉篤義, 1975, 『文章と表現』, 角川書店

仁田義雄, 1989, 「現代日本語文のモダリティの体系と構造」『日本語のモダリティ』, pp. 1～56, くろしお出版

仁田義雄, 1994, 「〈疑い〉を表す形式の問いかけ的使用—「カナ」を中心とした覚書—」『現代日本語研究』 1, pp. 6～14, 大阪大学文学部日本学科現代日本語学講座

野田春美, 1997, 『「の（だ）」の機能』 くろしお出版

森山卓郎, 1989, 「認識のムードとその周辺」『日本語のモダリティ』, pp. 57～120, くろしお出版

森山卓郎・仁田義雄・工藤浩, 2000, 『モダリティ [日本語の文法3]』, 岩波書店

山口明穂・秋本守英編, 2001, 『日本語文法大辞典』, 明治書院

山口堯二, 1990, 『日本語疑問表現通史』, 明治書院

吉田茂晃, 1994, 「疑問文の諸類型とその実現形式—ノデスカ／マスカ型疑問文の用法をめぐって—」『島大國文』 22, pp. 1～13, 島大國文会

(原稿受理 2003年11月7日)